

デザイナーのための経済コラム（8）

少子高齢化と高齢化率、後期高齢者について。

「少子高齢化社会」、「高齢者」、「後期高齢者」という言葉が使われるようになったのは、国連では人々の健康福祉増進のために規準としての年齢を「「高齢化社会：高齢化率7%以上14%未満」、「高齢社会：14%以上21%未満」、「超高齢化社会：21%以上」として決めたことによります。日本では国勢調査によって昭和45年(1975)に、高齢化率7.1%となった事によります。このころから少子高齢化という言葉が使われるようになったと推測します。高齢者を65歳以上、後期高齢者を75歳以上と決めた根拠は生物学的、医学的な根拠によるというよりも、厚生、労働などの行政上の定義です。この定義、線引きがないと、保険や年金などの政策、予算が立てられないからです。

これはあくまでも、行政上の都合です。ところが、この定義が絶対的な事のようにたいていの人たちは勝手に思い込んでいるように思えます。言葉の暗示にかかっているようにも、言葉に呪縛されているようにも思われます。昔からそうであったかのように、周囲の人たちが皆そういうからとしたりします。行動経済学では、ヒューリスティックバイアス、集団同調とも呼ばれます。2020年、日本は29.1%と超高齢化社会となっています。定年退職が55歳から60歳に、さらに65歳、70歳と変えられていきます。人為的に設定した定義は人為的に変えられることは容易に出来ます。

日本には「還暦」、「古希」、「喜寿」、「傘寿」、「米寿」という言葉があります。これらの言葉は高齢化も意味しますが、むしろ、長寿を喜び、祝う意味合いの方が強いと思われれます。言葉はポジティブにもネガティブにも使われる両面を持っています。「もう60歳」なのか、「まだ60歳」なのか、言葉を使う人次第でどちらにも取られます。

筆者の住む京田辺市の大住ヶ丘では51.9%と超超高齢化社会となっています。ここでは「高齢者」呪縛にかかって、自治会の役員を辞退する人や、自治会を退会する人さえ来て来ています。このような問題は日本の大都市およびその周辺都市で頻繁に起きています。マスコミに問題が表ざたにならなくても、問題は潜在的にあります。これは自治会だけでなく、高齢者が多い組織では必然的に起きているはずで

人々が「高齢者」の言葉の呪縛から解放されて、自分らしい、自分自身の人生があることに気付くことをしたいと願っています。コロナ禍の中、自宅で外出を自粛し、活動的になれず、悶々としておられる人は、まず、「高齢者」という呪文から目を覚ましてください。「高齢者」という暗示から抜け出してください。生涯現役を目指してください。そんな「高齢者」のモタモタする姿は若い現役世代から見ると、うとましく思えるかも知れません。

「子供叱るな来た道だもの 年寄り笑うな行く道だもの、来た道 行く道 二人旅 これから通る今日の道 通り直しのできぬ道」先人の言葉です。この言葉の力をどのように受け止めますか？

(T,K.記)